

巻頭言

国際教育センター長 阿部仁

新カリキュラム導入元年となった 2017 年の新学期は「未知との遭遇」の連続となった。履修登録期間の前倒しにより、過去最大規模の受入れとなった交流学生の日本語プレースメントテスト実施から履修登録提出までが実質 2 営業日と短縮化された（昨年 は 3 週間）。また、短期海外研修（モナシュ Global Professional Program、香港中文大学）が全学共通科目から国際交流科目に移管され、本学学生が利用する全学共通科目の時間割から姿を消した。学生に開講予定を周知する術が無くなったため、履修登録者数が最少催行人数を下回り、追加募集を余儀なくされている。

舞台裏での調整が続く中、2017 年 5 月 1 日の時点で一橋大学に在籍する外国人留学生の数は 793 名となり、在学生数の 12.6% を占めるまでになった。内訳は、学部留学生が 191 人（24%）、大学院留学生が 460 人（58%）、交換留学生が 142 人（18%）である。5 年前（2012 年）の在籍者数と比べると留学生全体では 17% 増加した。中でも交換留学生のここ 5 年の増加率（111% 増）が群を抜いて大きいのは、一貫して見られる本学の特徴的な傾向である。一方で、2016 年度に海外に留学した本学の学生は短期（休業期間）留学が 240 名、長期（一学期以上）の派遣留学が 126 名となっており、在学生数の約 6% を占めた。昨年度休学して自主的に留学した学生 23 名も加えると年間合計で 389 人が海外に留学したこととなる。2012 年度に海外に留学した本学学生は 190 人であったことを省みれば、この 4 年間で派遣留学の実績は倍増した。

留学生の受入れならびに本学学生の派遣留学規模が拡大し続ける中、2016 年度のセンターが取り組んだ主な事業について振り返りたい。まず、日本語教育部門では、2012 年に行った日本語科目群の技能別、レベル別の整理以降、授業の拡充を図り、2016 年度は夏学期に週当たり 67 コマ、冬学期に週当たり 45 コマの留学生向け日本語科目を提供した。授業内容についても、各学期に実施するセンター独自の授業評価アンケートによって学生からのフィードバックを受け、各担当教員が授業改善を行っており、学生のニーズに合った質の高い授業の提供を行っている。このような日本語授業の充実と併せて、情報発信に重要な役割を担う日本語教育部門ウェブページについて、ユーザビリティ向上を目指して大幅な改修を行った。

留学生・海外留学相談部門では渡航前オリエンテーションプログラムで、派遣留学に参加する学生に対しグローバルな環境で必要とされる能力の自己診断を行い、中でもコミュニケーション能力の向上を留学目標の一部として渡航前に意識付けさせることを強調した。同様のオリエンテーションプログラムを短期海外研修（スペイン企業派遣）にも展開し、自己のコミュニケーション能力の傾向を把握し、能力向上のために個々の行動計画を留学前に設定するというコンセプトを長期および短期の海外留学プログラムで共通化できるようになっ

た。

国際交流科目部門では、HGP 全体の開講科目数が 132 科目(前年度比 7 科目増)となり、そのうち英語で行われる科目が 113 科目(前年度比 7 科目増)と昨年度と同様の増加数となった。2016 年度は、商学部の開講科目数が若干減少したものの、経済学部、法学部、社会学部で英語による科目が増加したことで全体的に前年度と同数の増加につながった。

このように 2016 年度も様々な取り組みを行ってきたわけだが、ここからは 2017 年度に国際教育センターが取り組むべき課題について考えたい。日本語教育部門では、4 学期制への移行を見据え、2016 年度にレベル別、技能別の日本語プログラム全体の見直しを行った。従来、夏学期に開講してきた週 10 コマの初級集中日本語コース(Intensive Basic Japanese)を学生の変化やニーズに対応するため、週 3 コマの入門日本語コース(Survival Japanese)や新たに設けた初級から中級への橋渡しコース(Intermediate Japanese)などに大幅に改編した。2017 年度は、これらの新たな日本語コースの整備、および交流学生の急増に対応した日本語コース設計に全体として取り組むことが課題となるだろう。

留学生・海外留学相談部門では、留学生教育教員が寮生の教育に全員参加する「宿舎アドバイザー」制度が 2017 年 4 月に発足したことを受け、寮運営に関わる学生スタッフが必要とするスキル(予算作成、プレゼンテーション、傾聴、異文化理解等)向上のための体系的な研修プログラムを構築したい。研修にはOBや企業採用担当者など、現場で活躍するプロフェッショナルを積極的に活用する。

国際交流科目部門では、学期制と履修登録制度の大きな変更に伴い、交換留学生・日本語日本文化研修生に対する履修関係オリエンテーションと手続きの再構築が大きな課題である。また、交換留学生が増加し続ける中、各学部の GLP が提供する英語による専門科目と国際教育センターが提供する英語による日本・世界事情関連科目(国際交流科目)の連携を図り、HGP 全体としてより魅力的な科目群をいかに編成できるかが課題である。

末筆だが、2017 年 3 月をもって留学生・海外留学相談のアドバイザーとして、また国際交流会館の指導主事として昼夜を問わず現場指導にご尽力くださった商学研究科の渡部由紀先生が東北大学に転出された。渡部先生には本学の派遣留学生の学習成果を測る上で必要となる、渡航前段階における派遣留学生のコンピテンシー調査にご尽力いただいた。先生の多大なる貢献に心より感謝を申し上げるとともに今後の益々のご活躍を祈念する。渡部先生の後任は秋庭裕子先生が商学研究科の留学生教育教員として 2017 年 5 月 1 日付けで着任され、早速短期海外留学プログラムの立案や、国際交流会館の現場指導に奔走いただいているのは大変心強い。2017 年度、国際教育センターは引き続き専任教員 6 名、兼務・特任教員 7 名の 13 名体制で、本学における国際教育交流の促進目標である、学生に「アウェーで活躍できる自信」を習得してもらうための努力を続けている。

2017 年 6 月